**古典学習陶冶会会員のための経済・経営講座　第12回　「強く思う」**

**古典学習陶冶会会長補佐　志水達也税理士事務所所長　志水達也**

松下幸之助は1965年の関西経済同友会セミナーで講演をしました。内容は、「会社はダムのように、資金・設備・人員に余裕を持たせて経営すべき（ダム式経営）」というものだったそうです。講演後、聴衆の一人から、「おっしゃることはわかりますが、なかなかそれができない。どうすればダムができるのでしょうか」と質問があった。これに対し、松下は「まず大切なのは、ダムをつくろうと強く思わんといかんですなあ」と答えた。会場からは「なんだ、そんなことか」と失笑が起こったそうです。

　京セラを創業して間もない頃の稲盛和夫氏も、この講演を聞いていました。ただ、稲盛氏は、多くの聴衆とは異なり、大変な衝撃を受けたと次のように語っています。

「そのとき、私は本当にガツンと感じたのです。何か簡単な方法を教えてくれという生半可な考えでは、経営はできない。実現できるかできないかでなく、まず、そうでありたい、自分は経営をこうしようという強い願望をもつことが大切なのだ、そのことを松下さんは言っておられるのだ。」

強い願望を「量」とするならば、稲盛氏は、さらに、「質」の観点も後に指摘しています。その頃、日本の電話料金は、NTTの事業独占のため、欧米に比べ高価格でした。稲盛氏は、これを打破するため、第二電電（KDDI＝au）を立ち上げ、通信業界へ新規参入しようとしたのです。しかし、これには大変な困難と、京セラを窮地に追い込む程の、リスクが伴うものでした。稲盛氏は強い願望に加え、「お前がやろうとしていることは、本当に国民のためを思ってのことなのか？」、「動機善なりや、私信なかりしか？」という自問自答を数か月にわたり繰り返したそうです。この自問自答が携帯電話業界に新規参入するという大きな決断を支えたそうです。稲盛氏はこれを「大義」とも言っていますが、この言葉は論語の一節が出典だそうです。（注１）。

「子曰、視其所以、観其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉隠哉」

訳すと、「その行いを視て、その理由を観て、その結果（安）を察すれば、その人の正体は隠せない」となります。要するに、動機が善で、私心がなければ、良い結果が得られるというものです。

稲盛氏の著作を多数出版しているサンマーク出版の植木宣隆社長（注１）は、その著書でこの逸話を紹介した後、次のように語っています。

例えば、動物のノミは本来１メートルもジャンプできるのだが、３０センチの高さでふたをしたガラス容器に入れておくと、ふたを外しても３０センチしかジャンプしなくなる。この「自分は３０センチしかジャンプできない」という意識を「限界意識」といい、稲盛氏のように成功するためには、それを取り除くこと、つまり強く思うことが必要である。

以上の話は、「強い思い」を原因として、「動機が善であること」と「私心がないこと」を縁とすれば、限界を突破できて「ﾋジネスの成功」という結果が得られる。否、隠そうとしても顕れてくることを教えてくれています。成功している経営者（特に創業社長）の自信の背景にはこのような信条が隠されているのかもしれません。若者の新規創業（スタートアップ）が政府により推奨されていますが、是非参考にして欲しいと思います。

（注１）皆木和義、『稲盛和夫の論語』、あさ出版

（注２）植木氏は陶冶会顧問、植木宣隆、『思うことから全ては始まる』、サンマーク出版